

第六章 結論

個別処理型に比べて参加しやすく、集中処理型に比べて分別の手間がかからないだけ手軽な分散・集中処理型の2事例だが、まだまだ改善すべき点は多い。

甲賀市・水口テクノスのシステムは、参加者と堆肥の利用先の確保という点で優れている。事業開始後1年の時点での参加者が、桑名市の事例では約800人で、そのうち20%程度が途中で堆肥化への取り組みを断念しているのに対して、甲賀市の事例では約1100人が堆肥化に参加し、その多くが参加を継続している。堆肥の利用先に関しては、参加者が増えつづける限りは不足することはあっても生産過剰になることはありえない。

これらのことより、自治体などが主導して大規模な生ごみ堆肥化を行う場合や、堆肥を大量に利用できる田畑が少ない都市周辺部などで堆肥化を行う場合は、甲賀市・水口テクノスのシステムが望ましいと考えられる。

一方、桑名市・輪リサイクル思考のシステムは、人員・コストともに少なくて済むという点にアドバンテージがある。1次発酵を各家庭で行っているため、堆肥化施設では頻繁な切り返しや水分調整がいらず、回収も参加者による直接搬入なので、堆積と数回の切り返しのための最小限の人員さえいれば堆肥化を行うことができる。機械もほとんど使わないため、ランニングコストも低く抑えることができる。

NPOなどが行政による資金援助など無しで堆肥化事業に取り組もうとする場合、桑名市・輪リサイクル思考のシステムが有効である。